本間文庫
文庫 14
A175

文庫14
A175

追憶 二三

相馬御風

○

月日のたつのは速いやうで遅く、遅いやうで速い。嶋木さんが亡くなられてから今年は
そう七ヶ月だとしか。しかし、私にはそれが
何だか遠い〳〵昔のことのやうな気がする。
さうもと思へば何だかそれはつひこの間のこ

とてあつたんやうな気もします。

あの日私は富田市へ出てみた。そして或新聞社に用事があつてみた友人をその地の訪ねて話してみたところへ、宿の方へ今年の春は暖かいだけあつて桜の蕾が大きくふくらんでいたというと言ふ電話がかかつて来た。その電話を聞いたのの私の驚きは云ふまでもなく非常のものであつた。私は自分の所へ帰つてすぐにも上京しようかと思つた。しかし、それには何の支度もして来てみなかつたのでいやむを得ず一旦帰宅することにした。

ところが、そこの新聞社へはまたいそがしい通信がとこからも来てみなかつた。その事に陸で私の家から私への電話は、新聞社の遠には天来ということばの「とくだね」特種」であつた。私の悪病ふ思ひにうるさくて、強等は手をおたんはかりによろこんだ。私に対しては流石に淋しさうな言葉を口にしては居たものの、彼等の内心のよろこびは私にも明らかに察むことが出来た。

相馬御風

嶋村抱月氏といふ有名詩人あの多時の作品世間からとつくんな風に迎へられてゐたものとしふことを追懐することは、いにとりてもあまりに悲しくいたましい。

○

華やかな粧ひをしたあまりおほくの女の人達をそよしくたゞにぎやかな通夜の人達の間を通つて行つて、蠟燭の光の上に置かれたえまの棺前にあの絶望した母の姿を、今思ひもよらぬと（いのちが遠い）懐想して見る。

（二十行二十字）

相馬御風

三段

くにて、弁ついこの間のことのやうにもおもはれる。

おもふことと多くに過ぎて御柩にむかへとつめれはおもふことなし

通夜の人のにぎはふ中にまじらひて我はもの思ひをおもふとすらむ

上のめれの夢を見ごゝちのさめはてゝまことに立くはいつにかもあらむ

まつたくあの折の二日間の光景は、私にはたゞ〳〵夢心地であつた。何かの何かさつぱ

こわからまかった。用意を整めといはれても何も書くべき数字、言葉をかきまくるのを一つかった。私はたいしう一刻も早く出発の自分の家に戻りたかった。そして猫にあってあのもふもふをしみじみ、おもふさま考へたい！

一刻しも一分の時間が私の心を動かして痛てゐた。

ああ、ああ、かうもう七分になる。それをおもと[illegible]のたつのが速いやうで遅く、遅いやうで速いのだといふやうなこと

相馬御風

（二十行二十字）

かい、今更のやうにしみじみと感じられもする。

○

今日また山村さんが来てあつたらとうだつたらう。その後の文壇や劇壇の変化についてはわたくしはあまり詳しいことは知らないけれども、山村さんはあのまとまつた活動をつづけてゐるらしいから、おそらく今迄は物質的にも世間的にも一種の成金的な満足感にたらることかと、未だ[illegible]ほとそして自

ら想像のもし、また人と話しもするのである。

そして、更にさてさうあったとしたらとうだったらうと考へて見て、其時自分に執着過ぎてゐるやうなのが、何だかそんな風な男と、見すぼらしたことが、私のときには何とおくあり得ないことのやうに思はれて仕方がない。そこでは地方とやらの山村人は一個のさびしいそれでいい、それでいいと」

（二十行二十字）

かう自分に私のいは嘲弄くのである。

○

山村人は山茶花が好きであった。自然の風物に対して不思議なほどいま寂せることのかなかったのは人生の一つの苦しい性格の一面であったやうに思ふのが、さうした人生があの山茶花のやうな淋しい花の姿をしてゐるんだとおもふことは、更に深味一層不思議な事実である。

馬場

そんなまでに人生の墓の周囲に山茶花を置き

山を進しようちゃやいかとしるを企てから年を
はんやうであるから、ひろばお墓の
周囲にはその林しい風情を様ん皆木が茂り
合ってゐることであらう。そして毎年美楽
る会の中にあつて墓そのものがあの林しい
とを思かせつゝこつしてゐることであらう。
そんにしても、私はまだ其のお墓に
立てゐる。いつにあつたらその様一度も
会を行ることか、それまでまだ待つ事が
出来ない。私は是その修習するに絶えるも

相馬御風

知れない。しかし、此の七年間毎月の命日
に、私は毎の戒名を口にし、一枝の雪を
焚くとは必ずくこの
このせめてもの心やりである。

○

私は今年山林を自然の風物に心を寄せる
ことのかるかった人たちと書いた。これは
親しく
自然の中に接してゐる喜ばるる私の時
今年のことであつたか、私自身かうして田
舎に住んでとりわけ自然の風物に親しみやう

にあらずして、一層明らかにあらんまでもあ
った。

私達は先生のにかう自然の美について、又
は自然の風物の情趣についての言葉を聞いた
ことは、あまりにすくなかった。先生の書かれ
た文章の中からも、私達はその方面のすぐれ
た文章を見出すことがあまりにすくない。先生の
心は、先生の眼は、いつも人間に向って、人間の生活に向って注がれてゐた。そこに先
と人間と生の孤独の一層必然なる影響、そこに
生の淋しさの一層際立つ所以があったやう
にも思はれる。

先生はぼんやりと自然の美に見とれる
ようなことの出来ない人であった。自然
の美に対してはもちろんのこと、絶えずぼんやり
してゐるようなことの出来ない人であった。私達はあまりにしてはし
ば何をするといふでもなく、又何を考へてゐ
るといふでもなく、ぼんやりしてゐるやうな
先生の姿を見た。しかし、それは決して文学

通りのぼんやりいはるかった。むしろそれはえまの内部の働きのあまりに紛糾した立ち方からの結果であった。えまはとこくまいそぼんやりと何かに見惚れるとか、有頂天になって何かを感ずとか、さういった時は向を持ち得ない人であった。

さまざまの要素とにかけて、えまはひとつく忘れっぽい人であった。早稲田大学へ講義に出るのに赤ネクタイをするのを立ぬて行き、学校に着いてから漸に注意されて気

付いてあわてて附近の洋品店で面に合せのネを買って其場をすませたりとこのやうな近ちゃえまにはチヨイ〳〵あった。しかし、さうしたまゝ決して消ゆるところのぼんやりからのも結果ではなかった。

○

えまはとんな形式のものも書かれた。だけまの生涯を通して書かれたものは詩と歌とだけであった。長詩の大部分は生涯に書かれた歌とはアこはあるが、

まれとて歌を詠まうとして書かれたものは
あかつた。

その事を思つたと云ふに対してわれは一層さび
しい気持が惰すやうな気がする。

○

之迄はあらゆる方面にあらはれる美に対し
て、驚くべく敏感であつた。之迄の
美意識はあらゆる方面に向つて敏活に働いた。
絵画、彫刻、建築、工芸美術、人の衣物や性
身、何一つとして之迄の批判を免かれるものは

相馬御風

大十二年十二月

なかつた。之迄が最後迄に於て自己の性一
の進路を求められたのも、あるがために之迄の
事実から来てゐることは疑ふべくもない。

別1

ところが、そのうちの方面の美に対
しても、すぐれた眼識を持つてゐられたにも拘
らず、之迄は何一つ道楽といふものを持たれ
なかつた。之迄の身辺には寸毫も道楽の匂ひ
といふものがなかつた。着物にも、食物にも、
器物にも、室内装飾にも、化粧にも、道楽は常にあるより
にその事無きに驚かされてゐたばかりであつた。

上に抑えられた一輪の花を果しけて眺めてゐられるまでをすらわれ達は見ることは出来るか
つた。

さうしたまでの面影を思ひ浮べて見ると、
われは今ていたるまでいさぎよくうたれる。
あの柿まちヤーミンゲ、パワーを持つたまで
その人の面影を、さうしたさびしいと増量の前
に置いて思ひはつまれればよらぬことは、何と
いふ悲しみことであらう。
かういふ点でわかる過去に於て生果つた偉

相馬御風

（字十二行十二）

大な人々のうちに、それとよく似た境遇を
辿てゐる人は長谷川二葉亭たい一人あ
るのみである。二葉亭もまた才能の乏しさを
感じた人であつた。しかも、この両者とも
彼は比べるべくもなき偉大なる人物であつた。日本の
此の二人の偉大なる人物、そして
れも更に一層さびしいものであつた。

○

ああ、もうあれから七年になるのか。よ
ひ出せば[illegible]柿は果てしもなくある。

こゝかしこ、結局は~~[illegible]~~決點のうゝにこそ凡て
が收められる。父母のお墓の周囲の山茶花も
此年迄もう點つて花をこぼしいかせたり散らせたり
してゐることであらう。

相馬御風